

日向市街なか再生事業と連動したソーシャル・キャピタルの形成過程に関する研究*

Social capital development associated with city center renovation projects in Hyuga City *

辻 喜彦**・吉武哲信***・出口近士****

By Yoshihiko TSUJI**・Tetsunobu YOSHITAKE***・Chikashi DEGUCHI****

1. 研究の背景と目的

2003年(平成15年)に策定された「美しい国づくり政策大綱」以降、今後の社会資本整備においては、地域価値を向上させ、地域住民へ豊かな暮らしをもたらす、後世への資産となるような景観に配慮した良質な公共空間整備が求められている。また2006年(平成18年)には中心市街地活性化のための「まちづくり三法」が改訂されており、特に中心市街地の衰退が著しい地方都市においては、実効性を伴った地域再生プロジェクトの推進が期待されている¹⁾。

また地方都市の賑わい再生のためには、個別事業を越えてまちづくりや景観形成に関わる関係者の相互協力が不可欠である²⁾。特に地域再生プロジェクトにおいては、1) 複数事業の総合的な連携により地域景観に配慮した良好なインフラの一体的な整備(a)公共的都市機能の充実、b)民間都市機能の充実、c)官民境界を越えた一体的空間デザイン)、2)エンドユーザーである市民の計画段階からの参画により総合的な空間づくりを持続し活用していく市民ネットワークの形成等のソーシャルキャピタル(以下、“SC”と記す)の醸成、3) その両面をコントロールして長期的なプロジェクトを実現していくためのトータルマネジメント体制が必要となる^{3) 4)}。

ここで公共事業におけるマネジメントについて着目すれば、従来は建設マネジメントや地域マネジメントの観点から研究が進められることが多かった^{5) 6)}。また個別の市民参加についても多くの研究がされている⁷⁾。しかし、地方都市において地域再生事業を行う場合には、後述するように主体の異なる複数の事業を同時並行的かつ面的に実施するケースが多くなっているが、これらを地域再生プロジェクトとして連携・統合させるトータルなマネジメント(以下、本論では“トータルマネジメント”と記す)の方法論とそれらのインフラ整備と連動した市民のまちづくりへの参画意識の形成手法については

さほど研究されてはいない⁸⁾。

このような中で、宮崎県日向市駅周辺地域においては、中心市街地再生を軸に据え、質の高い都市機能の整備とともに市民主体の多様なまちづくり活動がデザイン会議(後述)によるマネジメントの下に展開されている。本研究では、前述の地域再生プロジェクトに求められるスコープ(目的と範囲)からプロジェクトマネジメント(PMBOK⁹⁾の9項目に基づき、特にSC醸成のためのマネジメントのフレームを情報管理、空間的管理、時間的管理の3つの観点から作成し(図-1)、「SCの醸成においてデザイン会議が意図した市民参加手法は有効であった」か否かを、日向市街なか再生事業(以下、“日向プロジェクト”と記す)に参加した市民委員の意識変化を分析し、SCの醸成に対する市民参加手法の有効性に関し考察・検討することとした。

マネジメント項目	1) 情報管理	情報公開 参画機会の 提供	活動機会の 提供 活動支援	竣工 イベント	自律的な 活動・交 流展開
	2) 空間的管理	関係者協 議体制の 立上げ	民有空間 への波及		周辺ア への波及
	3) 時間的管理	全体コ ンセ プト策 定	コ ンセ プトの 具現化		柔軟な 現場 対応
時間軸		達成目標			
		Stage-1	Stage-2	Stage-3	Stage-4

図-1 プロジェクトマネジメントのフレーム

具体的には、以下の手順で進めるものとする。

- 1) 事業記録書¹⁰⁾等より日向プロジェクトの時間的経過およびこれと連動した委員会設置プロセスを把握し、市民活動の展開実績を整理する。
- 2) 日向プロジェクトの各種関係委員会に参画した市民委員へのアンケート調査を実施し、本プロジェクトが及ぼした意識変化等を分析し、SC醸成面から評価を行う。
- 3) 以上の分析により、日向プロジェクトにおける市民委員の意識変化を検証し、インフラ整備と連動して市民参画を促し、持続性のある地方都市再生を実践していくための計画手法の有効性について考察する。

2. 日向プロジェクトの概要

日向市は宮崎県北部に位置し、その中心市街地は古くから日向および耳川上流部である入郷圏域の玄関口の

*キーワード：計画手法論、市民参加、ソーシャルキャピタル

**学生員、宮崎大学大学院農学工学総合研究科博士課程
(宮崎県宮崎市学園木花台西1丁目1番地、

TEL0985-58-7331、FAX0985-58-7344)

***正員、博(工)、宮崎大学工学部土木環境工学科

****正員、工博、宮崎大学工学部土木環境工学科

役割を担い、広域行政および広域商業機能の集積地として発展した。しかし1990年代(平成元年)以降、中心市街地の衰退が顕著となり抜本的な都市構造改革が主要な課題となった。

このため、日向市は1997年(平成9年)から日向市駅周辺の既成市街地を対象に街なか魅力再生の検討を行い、複数のまちづくり事業を総合的、同時一体的に進める「日向プロジェクト」がスタートし、市民、商店主、商工会議所やまちづくり団体等の参画による官民協働の議論・合意形成の場となる「日向市街なか魅力拠点整備検討委員会(平成10年～平成12年)」が設置された。

これとほぼ同時期に、学識経験者、事業者(宮崎県・日向市・JR九州)による“インフラ整備に関する協議・調整の場”として「鉄道高架・駅舎デザイン検討委員会(平成10年～平成12年)」および「日向地区・都市デザイン会議(平成13年～現在まで)(以下、D会議と総称する)」が、宮崎県都市計画課と日向市建設課の共同所管により設置され、その下に都市計画、土木設計、プロダクトデザイン、建築設計等の専門家によるワーキンググループ(WG)が編成され、関係機関、

関係者の相互協力体制のもとで本プロジェクトのトータルマネジメントに取り組むこととなった。

日向プロジェクトは、以下に概説するように大きく3つの事業から構成される(図-2)。

- 1) JR日向市駅を中心とした1.67km区間「連続立体交差事業(以下、連立事業)」(宮崎県事業)。
- 2) 駅周辺地区(17.6ha)「都市再生土地区画整理事業(以下、区画整理事業)」(日向市事業)。
- 3) 駅周辺中心商業街区(24.0ha)「中心商業地区特定高度集積整備事業(以下商業、集積事業)」(民間事業)。

以上のプロジェクトは、いわゆる「三位一体」事業を主軸とし、さらに県・市の働きかけによって、市民発意によるイベント開催や官民協働の街使い、街育て等の取り組みと連携している点に特長がある(図-1)。

なお、地場産杉材を活用した新駅舎を新たな日向のシンボルとしたハード面整備は、2006年(平成18年)12月に新日向市駅開業、鉄道高架切替え及び東口駅前広場完成、2008年(平成20年)3月西口駅前広場完成、2009年(平成21年)3月駅前交流広場完成によって第1期の整備を完了したところである¹¹⁾、¹²⁾。また高質な公共空間(鉄道高架下、駅前広場や街区の中庭空間)は市民主体の祭やイベントに活用され、開催回数、集客数とも年々増加傾向にあり、街なかに賑わいが戻りつつある¹²⁾、¹³⁾。

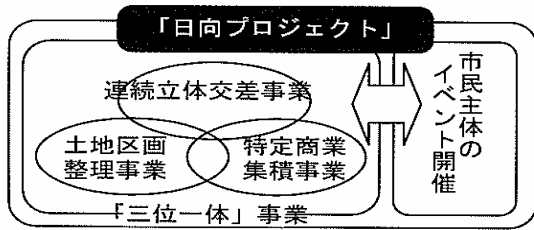


図-2 「三位一体」日向プロジェクトの概念図

3. 日向プロジェクト市民委員に対する意識調査

(1) 調査の目的と方法

日向プロジェクトにおいて、D会議を運営する県・市は、市民は地域再生の主役であるべきとの考えから、プロジェクトにより多くの市民が参画し、まちづくりへ

表-1 日向プロジェクトにおける関連委員会一覧

	連立+区画整理事業等(県+市)	中心市街地整備(市)	複合拠点施設整備事業(市)	中心市街地活性化基本計画(市)	特定商業集積整備事業(市+民間)
第1ステージ	平成10年(1998年)度	日向市街なか魅力拠点整備検討委員会	日向市生活・文化交流拠点地区整備推進委員会	日向市中心市街地活性化基本計画策定委員会・幹事会	
	平成11年(1999年)度	日向市街なか魅力拠点整備検討委員会			ひゅうが商業タウンマネジメント構想策定委員会
第2ステージ	平成12年(2000年)度	日向市街なか魅力再生検討委員会			ひゅうが商業タウンマネジメント計画策定委員会
	平成13年(2001年)度	日向市駅周辺道路設計ワーキング部会	日向市駅周辺街なか交流拠点整備検討委員会	日向市福祉のまちづくりモデル地区整備計画検討委員会	ひゅうが商業タウンマネジメント計画策定委員会
第3ステージ	平成14年(2002年)度	日向市駅周辺地区ふるさとの顔づくり委員会	日向市駅周辺街なみ景観づくり協議会		
	平成15年(2003年)度	日向地区都市デザイン会議			その他の団体
	平成16年(2004年)度				富高小学校
平成17年(2005年)度	日向市駅周辺地区駅前広場整備検討委員会				
第4ステージ	平成18年(2006年)度	日向市駅周辺地区駅前広場整備利活用WG	新町まち育てグループ		建築士会日向支部
	平成19年(2007年)度				
	平成20年(2008年)度				

市民の目が向けられることを主眼に置いて、インフラ整備を軸としたD会議における地区再生計画に関連した各種計画検討に市民の代表となる委員(以下、市民委員と記す)を主体として構成する委員会を設置した(表-1)。

本研究では、日向プロジェクトに市民委員として参画した地域住民のプロジェクト参画による意識構造の変化を把握することを目的として、日向市担当課の協力を得て、市民委員に対してのアンケート調査を実施した。本調査の概要を以下に整理する(表-2)。

表-2 市民委員に対するアンケート調査概要

アンケート配布日	平成 20 年 12 月 25 日
アンケート回収期限	平成 21 年 1 月 30 日
調査対象(82 名)	・日向プロジェクト関連委員会へ参加した市民委員 65 名
	・建築士会日向支部 10 名
	・富高小学校教諭(当時) 7 名
調査方法	郵送法(返信用封筒により返送)
回収率	64.6% (53 通/82 通)

(2) アンケート調査集計結果

1) 回答者の属性

日向プロジェクトにおいては、表-1に示すように各事業・年度ごとに計16委員会が設置されている。さらに、本プロジェクトには「建築士会日向支部(以下、建築士会と記す)」と課外授業を開催した「富高小学校教諭(以下、富小教諭と記す)」も重要な参加団体として加え、これらを含めた18委員会について、回答者の所属していた委員会(重複あり)を把握した。

回答者の所属していた委員会数については、1~3委員会への所属者が43人で8割以上を占めていた。また中には、「建築士会」と「富小教諭」を除く16委員会全てに所属していた回答者も1名存在した。

2) 市民主体で開催したイベントと参加形態

事業に対する市民の意識を高める目的で、行政および市民らが自ら主体となり、毎年多くのイベントが開催されている。このうち市民主体で開催されたイベントの一覧を表-3に示す。回答者のイベントへの参加形態については、“リーダー”、“リーダー補佐”、“運営スタッフ”、“一般参加者”から択一選択してもらった。

回答者53人中17人(32%)が“リーダー”、16人(30%)が“リーダー補佐”、38人(72%)が“運営スタッフ”、45人(85%)が“一般参加者”として、それぞれ1回以上参加したことがあると回答している。その内、イベント参加回数が最も多かったのは、“リーダー”として26回参加、“一般参加者”として33回参加した回答者が各々1名ずつ存在した。

3) プロジェクトへの参加が市民委員に与えた効果

日向プロジェクトへの参加によって、回答者自身に生じた意識の変化について5段階評価で判定してもらっ

た。その結果を図-3~6に示す。

表-3 市民主体で開催されたイベント等の推移

開催年	市民が主体で開催したイベント
平成 11 年~平成 14 年 富小授業(1)	(この段階ではまだ開催されていない)
平成 15 年	土曜夜市・日向十五夜祭り・中里村交流イベント
平成 16 年 富小授業(2)	商店街招福餅まき・日向十五夜祭り・土木の日フェスティバル・クリスマスイベント・土曜夜市・ハロウィン・「杉コレクション 2004」
平成 17 年 舗装材・案内サイン試験	スペシャルオリンピック・土曜夜市・七夕祭り 日向ひよっこ夏祭り・街なかハロウィン・日向十五夜祭り・ブラックイルミネーション・ゴールデンゴーズ歓迎式典・周年事業イベント
平成 18 年 新駅開業式典	土曜夜市・七夕祭り・日向ひよっこ夏祭り・街なかハロウィン・日向十五夜祭り・ゴールデンゴーズ歓迎式典・新駅開業市民イベント
平成 19 年 西駅広場完成 富小授業(3)	土曜夜市・七夕祭り・日向ひよっこ夏祭り・街なかハロウィン・日向十五夜祭り・西駅駅前広場完成イベント
平成 20 年 交流広場完成	土曜夜市・七夕祭り・日向ひよっこ夏祭り・街なかハロウィン・日向十五夜祭り・「杉コレクション 2008」・駅前交流広場完成イベント・駅市

図-3は、プロジェクト参加前後でのまちづくり活動状況を比較したもので、“参加前から、大いにまたは少し活動していた”とする回答者が53人中17人(32%)であった。その主な活動団体および活動内容は、地域社会活動、花植え、木工教室等である。それに対して“プロジェクト参加後の現在、自ら活動を行なっている”と答えた回答者が38人(72%)、“別の活動に参加している”との回答者が34人(64%)となり、どちらも2倍以上に増加している。

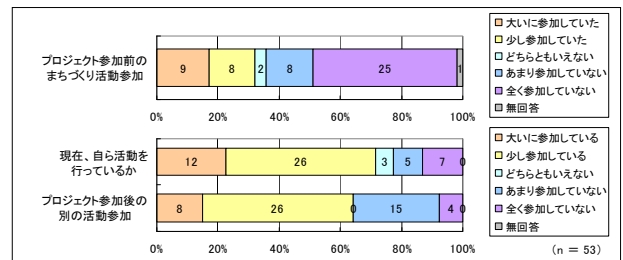


図-3 日向プロジェクト前後のまちづくり活動の変化

図-4は、日向プロジェクト参加前後での日向の街に対する関心度についての結果である。日向の街への関心はもともと高く、プロジェクト参加前53人中42人(79%)の回答者が“関心がある”と答えていた。プロジェクト参加後にはさらに関心が高まっており、53人中51人(96%)とほとんどの回答者が日向の街へ関心を持つようになっている。

図-5は、日向プロジェクトへの参加が回答者に与えた効果について示したものである。これらの項目の中で最も効果が表れている項目は、“地域への愛着心が深まった”(83%)。次いで、“地域や社会のしくみや問題がわかった”(79%)となった。

図-6は、SCの形成について得られた回答結果である。日向プロジェクトへの参加によって、“信頼できる行政担当者ができた”(77%)、“地域の様々な人とのつながりができた”(74%)という回答が多かった。

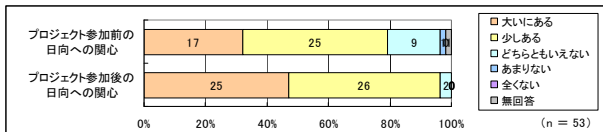


図4 日向プロジェクト前後の街への関心度の変化

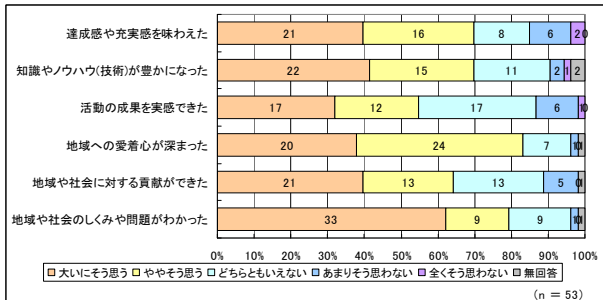


図5 日向プロジェクト参加が与えた効果

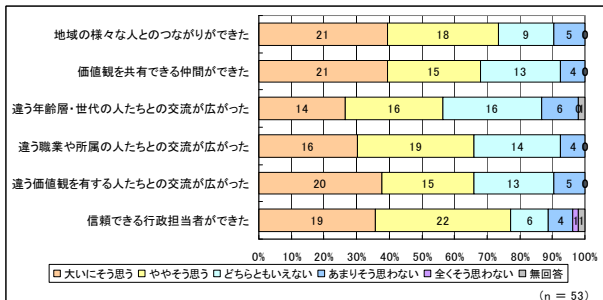


図6 日向プロジェクト参加によるSCの形成

4. 考察とまとめ

日向プロジェクトに市民委員として参加した地域住民の意識構造の変化を明らかにするため実施したアンケート調査から、以下のことが明らかとなった。

- 1)行政および市民主体で開催したイベントへの参加形態について、市民委員の約3割が“リーダー”、または“リーダー補佐”として、約7割の人が“運営スタッフ”として、各々1回以上参加していることが把握できた。このことから、プロジェクト進捗と連動して多様なイベント等の開催の背景には、自発的にイベント等を企画、運営、開催するようになった市民委員らによる活動があったといえる。
- 2)日向プロジェクトに参加した市民委員で“プロジェクト参加後、自ら活動している”人が2倍以上に増加している。これは、プロジェクトへの参加を契機としてまちづくり活動に対するさらに意識が向上し、継続的・自発的にまちづくり活動に参加する効果があったものと判断できる。
- 3)プロジェクトへの参加は、市民委員の意識に“地域への愛着心が深まった”、“地域や社会のしくみや問題が

わかった”等の効果を与え、地域に対する愛着心(SC)が醸成される契機となったといえる。

また日向の街への関心度は、プロジェクト後にはさらに高まり、大半の市民委員が関心を持つようになった。

4)プロジェクトへの参加によって“信頼できる行政担当者ができた”、“地域の様々な人とのつながりができた”等のソーシャルキャピタル(SC)の形成上の効果が表れている。

5)これらのことから、日向地区・都市デザイン会議(D会議)が統括・実施してきた市民参加手法は、日向プロジェクトにおけるSCの醸成に有効であったといえよう。

6)したがって、インフラ整備を契機として地域再生に取り組むケースにおいては、委員会等への市民参加のみならず、多様かつ積極的な働きかけを事業担当者及び専門家が実践し、参加機会を拡大することが、地域住民のSC形成や持続性確保に有効な手法となると考えられる。

参考文献

- 1) 大阪大学NPO研究情報センター: 日本のソーシャルキャピタル, 2005.
- 2) 国土交通省都市・地域整備局都市計画課: 国土交通省所管公共事業における景観検討の基本方針(案), 2007.
- 3) 新谷大輔: 産業集積とソーシャルキャピタル, 日本NPO学会第7回年次大会発表論文, 2005
- 4) 景観・デザイン委員会: 景観政策に対する提言, (社)土木学会, 2009.
- 5) 磯崎正晴: 土木技術者のためのデザイン・マネジメント, 山海堂, 1991.
- 6) 李三洙他: 大都市都心部における地域類型別エリアマネジメント推進組織に関する研究, 都市計画論文集, No.40-3, pp.481-486, 2005
- 7) 鈴木春菜・藤井聡: 地域愛着が地域への協力的行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学論文集, Vol.25 no.2, pp.357-362, 2008
- 8) 特集/景観法と土木の仕事, 土木学会誌, 第90巻第2号, 2005,
- 9) プロジェクトマネジメント協会: プロジェクトマネジメント知識体系ガイドpp.3-9,2000.
- 10) 土木デザインの現在+コラボレーション: 建築画報特別号, No.39, 2003.
- 11) 宮崎県土木部日向土木事務所: 日向地区都市デザイン会議報告書, 2005.
- 12) 市民・行政・専門家による駅を中心としたまちづくり: 土木学会誌, Vol.92-3, pp.6-7, 2007.
- 13) 日向地区都市デザイン会議: 市民・行政・専門家の協働による駅を中心としたまちづくり, (財)udc, 2007.